インタビュー

中国 成長の死角

オピニオン

社会批判への抑圧 革新的精神を殺す 一党支配の限界

東西冷戦の終結をもたらしたベルリンの壁の崩壊から25年になる。国家が仕切る社会主義経済の限界が露呈したにもかかわらず、中国は市場の力を取り込みながら世界2位の経済大国となった。今後の成長の死角は、どこにあるのか。中国の市場改革派の理論的支柱とされてきたハンガリーの経済学者、コルナイ・ヤーノシュさんに聞いた。

――2030年までに、中国の国内総生産（GDP）は米国を上回るとみられています。

「中国の人口は米国の4倍あり、いずれGDPで米国を抜くでしょう。確かに経済の規模にも重要性はあります。たとえばミサイルや戦車をたくさん持てるようになるという意味ですから。しかし、いまの時代、戦車の数で軍事力をはかれますか。戦車を連ねてどこへ乗りこむのですか。むしろ無人攻撃機などハイテク競争になっています。それを生み出す技術力で、中国は米国にはるかに及ばない。予測しうる何十年ものあいだ、追いつけないでしょう。そこに中国経済の問題がみえます」

――どういうことですか。

「米国は、自由に自分の考えや相手と異なる意見を言える。多くの人が知恵を出しあえる。私のように外国の研究者でも、公平に受け入れる大学があります。そしてイノベーション（革新）を進めるため、リスクをとって投資をし、成功すれば見返りを得られるオープンで競争的な金融市場がある。それはルールに従って動く信用で成立しています。中国にいま、それがあるでしょうか。もちろん中国は昔、皇帝のもとでいろんな発明をしましたが」

――羅針盤や紙……。

「そう。自由な社会だけがイノベーションの条件ではない、という反論もあるでしょう。中国が共産党の一党支配から選挙を通じた民主政治に変われば、イノベーションがすぐにでも起きるとも言いません。しかし、自由こそがイノベーションにつながるひらめきと、それを育てる環境に密接に結びついているのは確かです。権力からの抑圧を恐れている社会は、革新的な精神を殺します」

――一党支配下のハンガリーで過ごした経験からですか。

「中国には、1980年代までのハンガリーのような部分があります。（私有の経営など）経済の市場化ははるかに進みましたが、政治改革は遅れています。中国の知人たちも必要だとわかっていながら、はっきりとは言わない、東欧で生きてきた私には、彼らの気持ちがよくわかります。ハンガリーが民主化されるまで、私も著書を出版するために自己検閲して表現を抑えたし、英米での講演は諜報部員から秘密警察に一部始終が届けられていた。いまでも中国に行くと、外国の学者ですら、政治体制にあからさまに反対する意見の表明は避けたくなるでしょう」

――タブーの存在が自由な発想を抑える、と。

「中国で最高のタブーは一党支配への批判です。共産党が救世主で、無知な存在である人々を正しい道へ導いていく――そのことに疑問を持ってはならない。だから、人々は面倒に巻き込まれないように、自分で真実を働かせて抑える。ここ数カ月（言論の）状況は悪くなっているように感じます」

――具体的に言うと？

「批判的な言論や大衆の抵抗は間違いをあぶりだす信号なのに、抑圧する方向で動いています。刑務所へ送って口を封じても、原因を放置すれば問題は悪化する。政府が臨う相手は格差や腐敗、失業であり、問題を伝えてくれている人々ではない」

「抑圧されたなかで高揚するナショナリズムにも心配しています。私は愛国者です。ハンガリーという国、言葉、文化を愛しています。同時にほかの国の愛国心も尊重します。ナショナリストはそこが違う。自分の民族を最高位に考える。私は東欧の市民として、悲惨なナショナリズムを体験しています。他の民族への友情や共感を、憎悪や敵意に変えてしまう感情です。残虐行為や戦争にもつながりかねない。中国は隣和を重んじる文化のはず。ぜひとも、この危険を回避してほしい」

■ ■

――ナショナリズムを統治者が政治的に利用する恐れもあります。

「中国に政治改革がまったくなかったとは言いません。文化大革命が終わり、改革開放政策を始めて30年あまり、経済については比較的オープンに議論していると思います。マルクス経済学を強要するわけではないし、外国から資金だけでなく、技術や経営ノウハウも吸収してきました。『鉄のカーテン』の向こう側で特権階級しか外国へ出られなかった旧ソ連などとは明らかに違う」

――次の段階が必要だ、と。

「どんな専制政治も、その正当性と継続性を信じていく人たちがいるからこそ存在します。抑圧と警察権力だけで続くものではない。住民の不満や経済の困窮などが何かをきっかけにして、いまの体制への信頼の内部から別の方向をめざす動きが出てくるかもしれません」

「民主化への道のりは、一本道ではない。中国は経済成長の蓄積をへて、かつてのソ連や東欧よりも政治基盤を変えやすい状況です。成長を維持するためにも、じわじわと、だが、断固とした改革が必要です」

――なぜですか。

「中国経済は減速しているし、今後もこの状態が続くからです。過去30年にわたる高い成長率には感嘆していますが。同時に、心配もしています。中国の『奇跡』は、歴史に類をみない高い投資に牽引されたものでした。その代わり、消費の比率は非常に低い。国が稼いだ富の分配を、公平に受けられなかった人々の鬱積が後側にあったと言えます。成長の初期段階では不平等がうまく働くこともあるが、これからは違う」

――すでに資金あまりの、輸出競争力はしだいに低下しています。これから労働人口も減っていきます。

「生産性をあげていくには、精神的に健康で意欲ある働き手が欠かせません。住民の不満の背景にある収入だけでなく、権力へのアクセスの格差、教育、社会保障の不公平をただしていく必要があります」

「環境保護や安全な職場への要求も高まっています。これは生産コストの上昇や（統治への）政治的プレッシャーにつながるものです。そんな冷酷な相互作用が働くなかで成長を失速させないためには、人々の声をくみとる政治の改革が必要です」

■ ■

――社会主義の象徴とも言える国有企業の改革も課題です。

「中国は社会主義経済ではない。非民主的で権威主義的な一党支配体制下の資本主義経済だと認識しています。多くの財は、国家ではなく、市場で分配されている」

――しかし、金融や資源、土地など経済の根幹は国が握っています。

「純粋な資本主義とは言いません。巨大な国有企業が市場原理を浸透して経営に取り組むとは思いません。国有企業は共産党組織の上司の顔色をまっさきにうかがう。銀行だって不良債権が膨らんだときに助けてくれる政府の顔色をみる。だから採算がとれなくても政治的なコネがある相手に貸し込み、金融部門にリスクが積み上がるのです」

――借金を重ねている地方政府も似た構造です。彼らも『破綻』しないので借りられます。

「自分が経営の後始末をつけなくても都せられず、『請求書』も別の人が払ってくれますから」

■ ■

――社会主義経済の行き詰まりの背景といわれるコルナイさんの「ソフトな予算制約」の概念ですね。いまの中国経済にも残る弱点だと。

「国有企業については、国家が所有権を徐々に手放して、リスクに応じて責任をとるような市場の規律で動く経営に変えるしかないのですが、基幹産業の『私有化』はまだタブーに近いでしょう。政治エリートと官僚、窓が結びついた国有企業を変えるのは難しい。しかし、中国経済が競争力をつけていくには、やはり必要な改革だと思います」

「ただ、国家と市場は離婚できない夫婦のようなものです。一緒に存在するしかないのです」

――どういう意味ですか。

「どちらも不完全で、どちらかだけは成り立たない。でも良い結婚と悪い結婚があります。良い結婚は互いのミスをただしあう。市場が不公平な富の分配をしているとき、国家は税金や補助でただす。悪い結婚は、どちらかが独占的な地位を持つことです。全体主義的なシステムから移行しようとするとき、全知全能と思い込んだ国家が市場を支配したがり、ビジネスにも深く入ろうとした。中国が良い結婚にいきつくことを期待します」

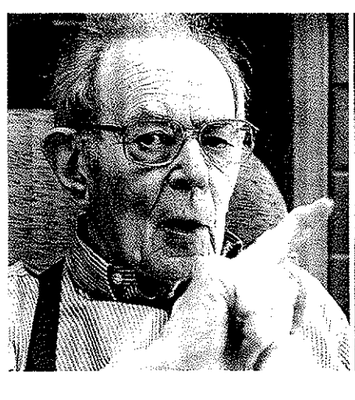
取材を終えて

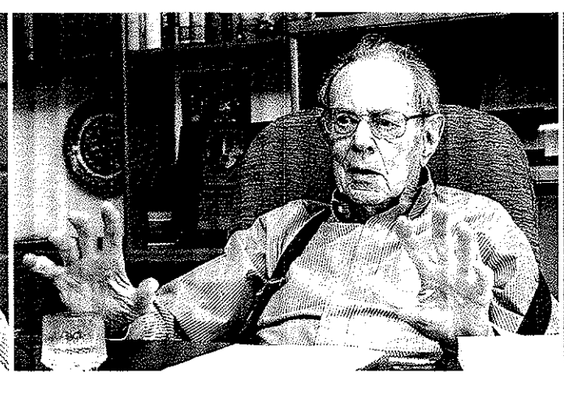
ドナウ川が流れるブダペストの自宅書斎に1枚の水墨画がある。85年に初めて訪ねた北京で求めたものだ。この時、趙紫陽首相（当時）らに「指令経済の清算」を改革の第一歩として説いた。社会主義経済の壁を分析した研究は世界で高く評価され、多くの著書が中国語に翻訳されている。移行経済の「巨匠」の指摘をいま、中国はどう聞くのだろうか。

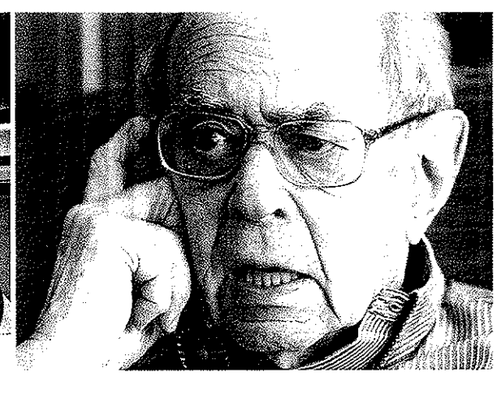
（編集委員・吉岡桂子）

ハンガリーの経済学者　コルナイ・ヤーノシュ さん

Kornai János　1928年生まれ。ハンガリー共産党機関紙記者から経済研究に転じ、84年に米ハーバード大教授（現在は名誉教授）。







「国家は過剰に権力を集中させようとする。警戒せよ」＝ブダペスト、ベリョシュ・スィラード氏撮影

http://www.huffingtonpost.jp/ ハフポスト 検索
THE HUFFINGTON POST から
IN ASSOCIATION WITH The Asahi Shimbun

「ボコ・ハラム」が支持される背景

阪大外国語学部スワヒリ語専攻　今泉 奏（いまいずみかなで）さん

アフリカ・ナイジェリアで過激派組織「ボコ・ハラム」が多数の女子生徒を誘拐し「人身売買する」と公言したニュースは世界に衝撃を与えた。「西洋式の教育は罪」という意味の組織が一定の支持を得る背景は何か。アフリカ史を専攻する今泉奏氏が「ナイジェリアのテロ組織『ボコ・ハラム』が主張する世界」（9日配信）で考察している。

現地の伝統的な教育は、大規模で普遍的な西洋式教育と異なり、「主に口承で伝えられ、その地域や集団に根付く知恵やしきたりが急激に失われる」。昨年、アフリカ人留学生がまとめた教育提言が、伝統教育を軽視していたと反省を込めて振り返りつつ、「西洋化に対する拒否」や、アフリカ的教育が西洋に受け入れられない閉塞感が背景にあるとみる。

筆者はまた、こうも問いかけた。「少女たちを売買できるのは貧しい手がいるから。日本でも同じように感かな貧しい手がいる」と。（吉野太一郎）

●アメリカの「スーパーリッチ」が世界の所得格差を拡大させる　0.1%の最富裕層が世界の富を独占（米、1日＝日本版4日）

米国の所得格差の拡大をグラフで解説した記事。上位0.1%の高額所得者が国の所得全体に占める割合は、30年で4倍に増加しており「アメリカほど富裕層が恩恵を受けている国はどこにもない」と批判している。http://huff.to/1mHHt71

●怒りに熱くなり、行動せずに忘れてしまう韓国の国民性の代償はあまりに大きい（韓国、2日＝日本版7日）

ハフポスト韓国版編集人のソン・ミナ氏が、旅客船の沈没事故を機に書いたブログ。新人アナウンサー時代に誤わったて災害報道の経験などから「簡単に許しても、忘れてもいけません」と徹底した反省と社会改革を訴える。http://huff.to/1kRwODN

顔色みて、魚の信号を察知

東京海洋大教授　吉崎 悟朗（よしざきごろう）さん

66年生まれ。88年東京水産大学（現東京海洋大学）卒業。12年から現職。魚類の生理学から育種まで、幅広く研究を進める＝山梨県北杜市、辻麗子撮影

すごい量の魚を殺してきました。世界でも100本の指に入るかな、というくらい。魚を守りたくて、その性質をくわしく調べる研究の道に入ったのに殺している。大変な矛盾です。

でも、それ以上に生み出している、というのが心のよりどころです。

7年前、世界で初めて、ヤマメにニジマスの精子を産ませることに成功しました。ニジマスの精子のもとになる細胞をヤマメの稚魚に入れてやると、細胞はトコトコ歩いていって、稚魚がオスなら精巣を、メスなら卵巣を作るんです。近い仲間なら別の種類でも拒絶しない。魚ならではの借り腹です。これを利用してサバにマグロを産ませる研究も進めています。

八ケ岳のわき水を利用した大学の施設に学生時代に6年間住み込んで、魚の飼い方にとことん習熟しました。

ある朝起きたら、魚が全滅していたことがあります。水槽が真っ白。へなへなと座り込んでしまった。パイプの継ぎ目がはずれて水がもれたのが原因でした。必死で配管を工夫しました。これだけの命を毎ってしまったという罪悪感が、一番の先生です。

成熟して親になるまでの期間をいかに短くするか、が大事です。ニジマスの場合、だらだら飼うと成熟するまでにメスは3年、オスは2年かかります。きちんと飼えば、それぞれ2年、1年。産卵は1年に1回だけなので、年単位の差が出ます。

大切なのはえさやりです。食べる様子や泳ぎ方から、病気はないか、成長はどうか、を探る。学生には「魚の顔色を見ろ」といってます。単なるえさやりじゃない、魚が発する信号をいかに察知するか、勝負の時間なんです。

小さいうちは競争させ、大きくなったらゆったりした環境の方がよく育つので、成長に応じて広い場所に移していく。真冬の冷たい水に手を入れて、排卵が近いかどうか、も調べることも欠かせません。卵が新鮮なほど実験の成績がよくなるからです。

生きた魚はアイデアの宝庫です。思いついたらすぐ、細胞やDNAを調べたり、実験したりできる。うまく魚が飼えることは研究上の利点が非常に大きい。飼育から最先端の研究まで一貫してできるところは世界でも珍しいので、米国の大学から、丸ごとスカウトしたいという申し出もありました。

西湖のクニマスの精巣も冷凍してあり、いつでも誕生させられるはず。絶滅危惧種の保存は、魚たちへの義務だと思ってます。（聞き手・辻麗子）

◇次回は20日に掲載する予定です。

リレーおぴにおん 私の必殺技 5